公益財団法人　埼玉県剣道連盟『広報誌』

剣風

公益財団法人
埼玉県剣道連盟

事務局　〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
http://www.saitama-kendo.or.jp
（編集責任者　豊島正夫）

第５号　平成25(2013)年11月21日発行　　（題字　野澤　治雄会長）

巻頭言

「剣道の国際普及と北本セミナー」

筑波大学名誉教授　範士八段　佐藤　成明

平成25年７月26日(金)から８月２日(金)まで解脱研修センター（埼玉県北本市）において全剣連主催『2013年（第39回）外国人剣道指導者夏期講習会』（2013 KITAMOTO Summer Seminar）が開催され、37カ国から女子13名を含む55名の受講生が剣道形、指導法、試合審判法を中心とした講習日程を全員無事に全うして終了しました。私は、今回も主任講師として参加の機会を得ましたが、外国剣士の剣を求める真剣なまなざしとひたむきな姿には心打たれるものがあります。

そもそも剣道の国際的組織化の芽生えは、1964年（昭和39年）の五輪東京大会に柔道が正式種目となった前後にあったと思われます。昭和45年（1970年）４月４日にオーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、中華民国、フランス、西ドイツ、イギリス、韓国、モロッコ、オランダ、スウェーデン、スイス、アメリカ、日本の15カ国からなる国際剣道連盟(International Kendo Federation IKF 現在は FIK と略称）が結成され、2013年現在、加盟国は53カ国に及んでいます。国際剣道連盟では「多くの国々への剣道の普及の促進」と「剣道を通しての国際親善を図る」ことを大きな「ねらい」とし、その目的達成のための七つの指針の一番目に「世界選手権大会（World Kendo Championships WKC)」の開催が掲げられ、第１回大会が連盟結成翌日の４月５日に、ハワイ、沖縄の特別地域を加えた17チームによって日本武道館に於いて開催されました。以来３年ごとの世界大会は、第16回大会が2015年５月に日本（東京）で開催されることが決まっています。

全剣連では各地域への剣道使節団の派遣、長期滞在の指導員の派遣を通して普及を図りました。在外公館や企業の駐在員、留学生、JICA・青年海外協力隊等海外で活躍する剣道経験者の貢献は絶大なものがありました。マレーシア剣道連盟の設立に尽力された豊島正夫先生の功績は顕著な例の一つです。「剣道の正しい普及」と「指導者の養成」を切望する国際的な要望に応え、昭和50年(1975)８月（２日～16日）に「第１回講習会」を千葉県勝浦市の日本武道館研修センターに於いて開催しましたが、会場確保他諸般の事情で、その開催が不可能になったのを機に、当時、佐藤顕範士が師範を務められていた解脱練心館を候補として笠原利章全剣連国際委員長（IKF 事務総長）を中心に解脱会との折衝の結果、昭和51年(1976)「第２回講習会」（８月７日～22日）の実施に踏み切り、以後、平成13年(2013年)まで世界選手権大会のある年を除いて毎年開催されています。当時の講習内容は、日本剣道形・指導法・試合審判法に加えて居合道が重要な科目として取り上げられていました。中倉　清、楢崎正彦範士をはじめ毎回、錚々たる講師陣が指導に当たりました。近隣の小・中学校の体育館の三箇所に分かれて実施したこともありました。快適な宿泊設備、行き届いた食事、そして完備された道場で、当時の岡野武徳解脱会理事長を筆頭に、歴代の理事長・職員の皆さんの心の籠ったおもてなしを受けつつ今日に至っています。全員に浴衣が支給されて日本情緒豊かな「盆踊り」、茶道の経験もさせていただき、寝食を共にした合宿生活は互いに磨き合う国際親善の場となりました。例年、埼玉県剣道連盟の御支援もいただき、受講生の謝辞には『北本は我々世界の剣道人にとっての心の故郷です。将来、自分の修行の在り方を故郷で見直すために再度訪れる機会があることを願っています』との一同の感謝の意が述べられています。いまや北本セミナーの出身者が、各国で中心的な指導者として剣道普及に尽力しています。競技剣道として広く普及されつつある今日の剣道界にあって、夏期講習会開催の地「北本」は世界の剣道人が求める日本の運動文化としての『剣道の発信地』としての重責を担っているのです。

セミナー参加者に講話中の佐藤主任講師

「栄冠、いまここに」

第５回全日本都道府県対抗女子剣道大会に初優勝を飾って

監督　堀川　智子

平成25年７月15日、日本武道館で第５回全日本都道府県対抗女子剣道大会が行われました。本大会は「全国家庭婦人剣道大会」改め高校生・大学生を含む年齢別の５名の選手による都道府県対抗戦として平成21年より実施されています。本県は過去４回のうち第１・２回大会で３位に入賞するものの、今一歩で優勝することはできませんでした。

４月に本県予選会が行われ、先鋒・岡崎愛美選手（淑徳与野高校３年）、次鋒・田中尚子選手（立教大学３年）、中堅・荒井貴子選手（蓮田南中勤務・久喜支部）、副将・市村麻美子選手（日本女子体育大学勤務・朝霞支部）、大将・栗田幸枝選手（越谷西高勤務・高校支部）の５人が代表権を勝ち取りました。予選会の後、野澤治雄会長より監督を仰せつかり責任の大きさに一瞬怯みましたが、何かお手伝いできることがあればと思い有難く承諾させていただきました。

５回の強化練習においては国体・教職員・全日本選手権に出場される選手の皆さんをはじめ多くの剣友に参加していただき、充実した練習ができました。６月末には昨年に引き続き福島県と山梨県にお越しいただき試合・稽古等、大変貴重な経験となりました。７月に入ってからは猛暑日が続き体調管理も心配されましたが、各自調整に努め本大会に臨みました。

１回戦、第１試合ということで固さも懸念されましたが、第１回大会優勝の新潟県に３－１で勝利。次鋒の田中選手が試合前に「ワクワクする」と言っていたのが印象的で、その通りに伸び伸び戦ってくれました。副将の市村選手も落ち着いて良く攻め、見事な小手を決めました。

２回戦の大分県、３回戦の愛知県戦では先鋒の岡崎選手、中堅の荒井選手の活躍が光りました。岡崎選手の高校生とは思えない素晴らしいすりあげ技と返し胴、荒井選手の思い切りの良い面が決まり２－０で勝利しました。４回戦は強豪鹿児島県です。ここでも荒井選手の迷いのない豪快な面が二本決まり会場が大歓声に包まれました。１－１となり、チームの勝敗は代表戦にもつれこみ大会の規定により大将が臨みました。難しい相手でしたが、栗田選手は終始落ち着いた様子で、見事に引き小手を決め勝利しました。

準決勝の徳島県戦では先鋒・次鋒が大活躍し岡崎選手が面２本、田中選手が得意の小手返し面を２本決め２－０で念願の決勝進出となりました。決勝の相手は神奈川県です。一本先行されたものの、市村選手が気迫のこもった小手を決め１－１で大将戦になりました。時間内両者一歩も譲らず、栗田選手が再び代表戦に臨むことになりました。終始攻め続けた栗田選手の一瞬の隙をつく引き面が見事に決まり、埼玉県に初の栄冠をもたらしてくれました。さらに、豪快な面で会場を沸かせた荒井選手が優秀選手に選ばれ、二重の喜びとなりました。

選手の皆さんは終始明るい雰囲気で、試合では気迫に溢れた攻めから果敢に技を出し、要所要所で各自持ち味を発揮する素晴らしい内容だったと思います。選手を影で支えていただきました御家族、御関係の皆様には心より感謝申し上げます。皆さんの声援が大きな力になりました。ありがとうございました。

最後に野澤治雄会長、山中茂樹強化委員長をはじめ、多大なる御支援をいただきました鋪野猷爾先生、佐藤理恵先生、今濱由美子先生、多くの先生方に心より御礼申し上げ、簡単ではありますが優勝の御報告とさせていただきます。

「決勝戦を終えて」

大将　栗田　幸枝（越谷西高校教諭）

まず、この度の大会の優勝に際しまして、今までご指導してくださった多くの先生方や先輩方、いつも応援してくださっている多くの皆様に、心から御礼申し上げます。今回の優勝は私達選手だけの力ではなく、周りで支えてくださっている多くの方々のお陰だと思っております。チームメイトにも恵まれ決勝戦まで上がれた時、本当にそう感じておりました。

決勝戦。先鋒が一本取られたまま副将戦となり、副将が終わった時点でリードされたままでは、正直取り返すことは厳しいと思っていました。そう思っていた時、副将の市村選手が見事な小手を決めてくれました。これで全くの五分。チャンスがきた。仮に負けても若い選手に責任を背負わせなくてすむと考えていました。それと同時に、今までの試合での苦い思い出が色々と頭を

よぎりました。いざ試合場に入ると、思っていたよりも冷静だったように思います。代表戦になっても監督とチームメイトの笑顔に送られ、集中した状態で試合場に入ることができました。決めることができた引き面は瞬間的に出た技でした。決まった後の監督とチームメイトの顔が忘れられません。試合直後は優勝したという実感が湧きませんでしたが、表彰式で肩の重みを感じた時、本当なんだと実感しました。

一度しかない今回のチームの一員として出場させていただき、このような貴重な経験をさせていただけたことに心から感謝しております。今後もこの経験を活かし、精進していきたいと思います。

（写真提供　全日本剣道連盟）

頂点を目指して

「第68回東京国体少年女子に準優勝を遂げて」

少年女子監督　平井　健輔

この度、第68回国民体育大会におきまして、埼玉県少年女子は２年連続の準優勝という結果を収めることができました。この成績は、日頃から多大なるご支援を賜ります埼玉県剣道連盟をはじめ、高体連剣道専門部、そして埼玉県の剣道を応援して下さる皆様の御協力によるものと感謝いたしております。

インターハイで団体ベスト８の淑徳与野高校の選手４名に、埼玉栄の端（はた）選手が加わった今年のチームは、昨年の準優勝メンバーが３名残っているということで非常に他県からマークされ、またそのプレッシャーの中での戦いとなりました。京都での国体練成会や、強豪大学との試合及び強化合宿を重ね当日を迎えましたが、レベルの高い関東ブロックはやはり非常に厳しい戦いの連続でした。箱根という遠方で、悪天候にもかかわらず大勢の応援の方に来て頂き、迎えた初戦の千葉戦は緊張の為か、先鋒の動きが固く二本負けを喫し、次鋒が勝利するも中堅も落とし、早くも窮地に追い込まれましたが、副将が冷静に試合を運び延長で勝利。大将戦では、端選手の堂々たる戦いぶりで相面を決め辛くも勝利すると、続く神奈川戦でも同様の大将戦で勝利し、リーグ１位で国体出場が決まりました。決勝は茨城などの強豪を倒してきた山梨を４－１で下し、８年ぶりに関東ブロックで優勝することができました。

準優勝に輝く選手・コーチ陣

９月29日に行われた国体本戦、初戦は九州ブロックを制した強豪熊本でした。選手・スタッフともに、この初戦が大きな山場と臨んだ試合は、先鋒が動きよく先取するも二本返され落としましたが、次鋒中堅と連勝、全国個人優勝の熊本の副将には星を落としましたが、大将戦でまたも端選手が素晴らしい動きで制し、ベスト８に進みました。準々決勝の青森戦では、初戦の大将戦の勢いをつなげ、前半３人の連勝で３－０の勝利を収め、二日目に進出。９月30日準決勝の新潟戦は、新潟が先鋒副将、埼玉は次鋒中堅に勝利し大将戦に。延長となる緊迫した大将戦の中、端選手の豪快な飛込み面が決まり、２年連続の決勝進出が決まりました。決勝の相手は奇しくも昨年と同じ岐阜県でした。全国選抜王者の麗澤瑞浪高校単独チームですが、埼玉県の総力を持って臨みました。先鋒駒林選手は先取されるも素晴らしい面を二本決め逆転、次鋒岡崎選手はブロック大会から準決勝まで唯一全勝の選手でしたが決勝で初の敗戦、中堅辻本選手は非常に長い延長戦を制し王手をかけるも、副将尾関選手が終始攻勢ながらも延長で打たれ、大将戦にもつれました。ここまでいくつもの大将戦を乗り切ってきた端選手も、果敢に攻勢しましたが惜しくも破れてしまいました。しかしながら、２年連続決勝に進出した選手の成長を大いに感じ、選手・スタッフ・関係者の方全てで、喜びを分かち合えたという素晴らしい経験をさせていただきました。ご声援いただいた皆様に本当に感謝しております。ありがとうございました。

＜出場選手＞

先　鋒　駒林　八枝（淑徳与野）
次　鋒　岡崎　愛美（淑徳与野）
中　堅　辻本　　葵（淑徳与野）
副　将　尾関　　奏（淑徳与野）
大　将　端　真璃華（埼玉栄）

＜強化スタッフ＞

監　督　平井　健輔（淑徳与野）
コーチ　那須　健司（城北埼玉）
コーチ　菊地　道隆（上　　尾）

栄光の足跡　「夢に日付を入れよう！」

埼玉大学名誉教授
元埼玉大学剣道部監督　塩入　宏行

埼玉県剣道連盟広報誌「剣風」より、第25回全日本女子学生剣道大会初優勝に至るまでの“栄光の足跡”を、との原稿依頼を頂きました。学生時代に中野八十二先生から、「負けに不思議の負けなし。勝ちに不思議の勝ちあり。」と教えられましたが、あれは、本当に＜不思議の勝ち＞だった感じます。今でも、多くの先生方に支えられ、正しいと信じた指導方針を貫き通せた達成感・満足感を味わっています。本稿では、学生達からの「最高の定年退職祝」がどのようにして実現したかを再考しました。

１．一人ひとりを大切に育てる。

着任以来最初の15年間は、池嶋（Ｓ57卒）、坂口（Ｈ３卒）のようにインターハイベスト８の戦績の持ち主が入部することはあっても、それは例外中の例外とも言うべき存在で、主力選手のほとんどは、川越高、松山高、不動岡高など、県内の進学校出身者でした。Ｈ２に推薦入試制度が採用され、全国レベルの大会で優秀な成績を残した学生が集まるようになりますが、入学後初めて竹刀を握る部員もおり、一人一人が目的をもって稽古に取り組める工夫が必要になりました。そこで、稽古の目標を明確にし、全員に周知徹底させるため、自分の言葉で書いた目前の短期目標、中・長期目標を道場に貼り出すことにしました。

＊全員が剣道・居合道・杖道を修練。

居合道、杖道を学ぶと、手の内、体捌き、礼法などを身に付ける上で、現代剣道にいかに大きな利益をもたらすかを実感できます。また、剣道だけでは何となく固定しがちな部員間の序列が、微妙に変わってくることも他の２道を修練する以前には予想できなかった長所でした。

＊勉学との両立を考えた朝稽古。

学年が進むにつれ、ゼミ、実験や実習その他で、午後の練習に参加できなくなります。週３回の朝稽古は、勉強が忙しくなっても参加できるので、とくに理工系の学生たちが頑張っています。

＊負けたら、指導者は学生と一緒にその原因を考え、対策を練る。勝ったら、さらに良い勝ち方ができなかったかを考えさせました。

真中を割るような面、あるいは諸手突きで負けたのと、散々逃げられ、嫌気がさした所で小手を拾われたのでは、同じ負けでも、ダメージが全く異なります。力のある選手に対しては、＜相手を完膚なきまでに叩きのめす勝ち方＞を求めさせました。

２．正剣を求める。

＊「攻められたら攻め返せ。」

相手の攻めに対して、退って間合いを切るのは試合を放棄して逃げること；隙がないのに、苦しまぎれに打って出るのは、墓穴を掘るだけ；打って来ないのに防御姿勢をとるのは、相手に遣われること；中でも、左拳を頭上にあげる所謂「三所隠し」は剣道の最も大切な修行の機会を放棄する愚行として厳禁しました。＜中段の構えの確立＞は、鳳雲（菅沼）先生の口癖でした。

３．先ず量を、次に質で鍛える。

日頃の稽古は短く集中させ、合宿や寒稽古時は特別メニューで鍛えました。

＊埼大スペシャル・メニューとトレードマークの竹胴

埼大剣道部の師範の先生方は、全くの無報酬どころか、＜持ち出し＞で学生の指導に当たってくれています。山田義徳（Ｓ63卒）が主将の頃からでしょうか、切り返しで学生たちを徹底的に鍛えられるようになりました。鳳雲老師の後押しのお陰です。また、山口力也（H13卒）のように、現役時代の老師の話に感銘し、埼大関係者の誰一人として挑戦したことのない＜１週間の断食稽古＞に挑む者も現れました。

鳳雲老師は厳しい内容からは到底想像もできないような優雅な名称をつけてくれました。竜田川（いつ終わるか分からない連続挑躍面打。千回も早く振る⇒ちはやぶる、神代も聞かず竜田川から）、玉簾（特別に指名された者が元に立ち、通例夏合宿で行われる２対１、あるいは３対１の相掛り稽古。持続時間は通例40分）、回翔（春合宿の定番メニュー。３分間連続切り返し。学年によりラウンド数は異なり、１年生３、２年生６、３年生10、４年生12ラウンド）など、埼大剣道部のスペシャルメニューは、JICA シニアボランティアとして２年間指導したチリでも毎年、行われています。

老師が鬼籍に入られた折、奥様から「剣道部のために使って下さい」と頂戴した香典の一部（100万円）が、名匠鈴木謙伸翁丹精の竹胴となったことは周知のとおりです。

＊「チーム・ワークは厳しい稽古からしか生まれない。」

寒稽古の折、浦和市剣連前会長、豊島先生は、「苦しさの中に、小さな楽しみを感じられる人間になれ」と教えてくれ、フラフラになりながらも、休まず次の相手に打ち掛かる大学生を見た中学生は、「カッコいい！」といってくれました。「苦しいときには、周りを見よ。苦しい中で同じように頑張っている仲間がいるぞ」と教えています。

４．自分より強い相手を求める出稽古。

＊「強い相手の胸を借りよ。コテンパにやられても、気力をもらえる。」

試合前、警視庁・県警の特錬・格上への大学などへの出稽古には引率しても、学生が勝てそうな手ごろな相手を選んだときには、絶対について行かないことにしていました。最初の頃、学生たちは新木場の警視庁の道場に独特の雰囲気に呑まれて、小さくなっていましたが、数を重ねるごとに場馴れし、少しずつ本来の力を発揮できるようになりました。到底勝てないと思っていた強敵に一人でも仲間が勝つと、自分も勝てるかもしれないぞという気持ちが部員間に波及します。また、大会などで、よく稽古をつけて貰っている学連ＯＢの警視庁や県警の先生が審判に回ってくると、選手たちは「よく見て貰える」と安心したようです。

女子が全国制覇した年の夏、筆者の現役最後の年ということで、大阪体育大学が長野の合同合宿を受けてくれました。猛練習で有名な体大生を向こうに回して一歩も引かず、逆に正面からぶつかって＜当たり勝ち＞する選手たちを見て、今年はいけると確信を持ったことを思い出します。

高山勝彦・高村久美子（H18卒）の二人が全日本学生（個人）で準優勝を果たすと、学生たちは自分たちが「今までやって来た稽古でいいんだ、これで行けるぞ」と、自信を持ち、やがてそれが確信に変わりました。その後は、栄光への道を一直線に突っ走り、関東学生（H14）では男子が強豪明治大を破りベスト８、同年の全日本学生で３位入賞、女子は関東学生制覇（H17体育学部／武道学科をもつ大学が独占してきた関東学生で地方の国立大として初の快挙）、翌年（H18）、名古屋で開催された全日本女子学生では、星、松永、澤部、山尾、影山ら鉄壁の布陣で優勝、夢に日付を入れることができました。

志藤・加賀谷・菅沼の３先生が大局を押さえてくださり、大保木不全先生が女房役として補佐してくれる理想的な環境の下、全力で学生と接することができたことに改めて感謝の意を表します。蛇足を承知で付け加えれば、不全先生との２人３脚がなければ、以上の栄光の記録は100％存在しなかった筈です。

（2013年10月13日、諦舟記）

平成19年　全日本女子学生初優勝に輝く

第１回埼玉県杖道大会を終えて

埼玉県剣道連盟杖道部長　教士七段　瀧澤　利行

平成25年９月29日（日）、埼玉県上尾市の埼玉県立武道館第２道場において、記念すべき第１回埼玉県杖道大会が開催された。本大会は、埼玉県剣道連盟に杖道部が開設されて13年目にして実現した待望の大会であった。公益財団法人として組織・運営ともに充実している埼玉県剣道連盟において、剣道、居合道と並んで杖道においても県大会が挙行できるようになったことは、実に意義深いことである。

当日は、野澤治雄会長の代理として副会長の関口善行先生はもとより、本連盟の会長在任中に杖道部設置に多大なご尽力をいただいた埼剣連名誉会長の大久保和政先生にご臨席いただき、両先生から開会にあたって、杖道の意義や特徴、人間形成としての杖道の本質等について今日の武道の現状との関わりを含めて、きわめて有益なご挨拶をいただき、選手、審判、係員一同が本大会の開催を心より喜ぶことができた。

試合は、個人戦と団体戦とが実施された。個人戦は一級以下の部、初段の部、二段の部、三段の部、四段の部、五段の部の６階級で階級ごとにトーナメント方式で行われた。選手は仕（杖）のみの演武を同段位の次選手を打（太刀）として行い、演武後は仕・打を交代して、演武を行い、終了後に次の試合者と入れ替えをする方式とした。仕のみの演武を３人の審判によって判定する。団体戦は、県下の杖道部に所属する団体がトーナメント方式で行われた。各団体は先鋒、中堅、大将の３将一組で出場し、第１戦は先鋒（仕）―大将（打）、第２戦は中堅（仕）―大将（打）、第３戦は大将（仕）―中堅（打）と３回の演武を行い、優劣を判定する。

試合は、個人戦が一級以下の部35名、初段９名、二段11名、３段23名、４段21名、５段６名の計105名、団体戦が13団体計39名が出場し、昨年、本大会錬成の一環として行われたプレ大会での教訓をもとに覇を競った。

それぞれの階級、団体戦において息をのむ熱戦が展開され、高段位や団体戦の試合ではまさに固唾を呑むかのような緊張感の中で演武に見入った。その結果、個人戦では一級以下の部では笹部慶江(久喜杖道会)、初段の部では石原仁道（浦和杖道会)、二段の部では畑山良一（大宮杖道会)、三段の部では江口佳寿美（久喜杖道会)、四段の部では長島恭彦（武南杖道会)、五段の部では野口京子（久喜杖道会）がそれぞれ優勝を手にした。団体戦では、個人戦において結果として２階級の優勝を得た選手２名を擁した久喜杖道会が13団体の接戦の中で覇を制し、第一回の優勝団体となった。

試合終了後は、審判団のうち７段位にある上田花代子、天野宏宣、平野弘美、斎藤力夫の４氏によって全日本剣道連盟杖道の７本目から12本目が模範演武として披露された。

表彰を兼ねた閉会式では、各階級、及び団体に優勝から三位までの表彰が行われ、関口大会会長代理より、杖道の形や試合が剣道の理合といかに通ずるかを熟視しつつ観戦し、大いに得るところがあったとの総括を受け、成功裡に閉会した。

本大会開催にいたるまでには、会場の確保、出場選手のトーナメント表構成、競技運営の細部にわたる確認、審判研修など数々の準備がほぼ１年にわたって尽くされた。とりわけ上田花代子常任理事、松浦富士雄事務局長をはじめとする杖道部理事会においては、開催にあたり長期にわたって万般の配慮を巡らせていただいた。ここに県下の杖道愛好者に代わってお礼申し上げたい。また、公益財団法人埼玉県剣道連盟が本大会の主催を決定していただいたことに心から感謝申し上げたい。

加盟団体紹介（その⑤）

越谷剣道連盟　－健全なる青少年育成と生涯剣道－

会長：矢部　勇介　事務局長：石川　雅久

1　沿革及び現在の組織　越谷剣道連盟は、戦後「しない競技」発足と同時期の昭和27年頃より、当時の警察署長及び武道関係者有志により「越谷武道振興会」（剣道・柔道・銃剣術の３団体）を結成し、大会等の開催を中心に振興に大きな成果を収めた。その後、町村合併により町から市へと飛躍発展と共に市体育協会設立と同時に、本連盟は加盟した。越谷剣道連盟主催による稽古場を越谷市立越ヶ谷小学校講堂、越谷市立体育館、現在の越谷市立総合体育館武道場へと拡充躍進の道程を経てきた。特に、市内中学校・高等学校剣道部顧問の先生方、生徒保護者と越谷剣道連盟の指導者による稽古会・剣道大会を30年以上続けている。また、剣道人口の増加に伴い市内各地区の剣道高段者による少年剣道が盛んになり、道場・剣友会・スポーツ少年団・公民館剣道教室・警察少年剣道・市役所剣道・家庭婦人剣道など、少年・学生・一般の団体が20を超えている。

現在の越谷剣道連盟加盟団体

出羽剣友会（松浦平八郎）、白桜剣友会（大塚邦）、心身錬成道場大義塾（豊島一虎）、南越谷剣友会（青野幸二）、大袋剣友会（村木六十教）、千間台剣士会（菅野一人）、大相模剣道クラブ（小沢尚）、蒲生少年剣道クラブ（土田浩志）、荻島剣道クラブ虔武館（永松教孝）、剣峰館道場（赤峰博幸）、実明館道場（中野茂）、清浄院剣道教室（髙田新次）、越谷剣道クラブ（髙瀬英治）、桜南剣友会（田島勇）、武蔵館（今濱由美子）、越谷警察署少年剣道教室（根本洋）、越谷市役所剣道部（五十嵐治）、北剣会（関口徳昭）、越武会（髙田マリ子）、越谷高徳館（渡邊秀樹）、越谷剣心館（上村厚子）、友心館（川越孝広）、市内中学校・高校剣道部・獨協埼玉中学高校剣道部の加盟団体で構成している。

2　活動状況と今後の抱負　本連盟の主な活動は、連盟稽古会を毎週土曜日・日曜日の午前９時30分～11時30分、総合体育館武道場にて実施している。市内の会員はもとより近隣市町からの参加者も多い。７月の夏季錬成会と１月の寒稽古会及び年越稽古会も永年の稽古会として発展してきている。主な大会の開催では、市内小学生剣道大会（参加資格、市内加盟団体の小学生）、優勝胴大会（参加資格、夏季錬成会参加者）が小学生の部・中学生の部・高等学校の部で開催している。市民剣道大会（参加資格、市内加盟団体の高校生以上の男・女会員及び市内高等学校の生徒）、市内中学校・高等学校冬季剣道大会（参加資格、市内中学・高校生徒）を開催し、交剣知愛と健全なる青少年育成を図っている。

本連盟加盟団体の熱心な指導者により、指導成果が出ている。埼玉県剣道大会小学生の部においては、第９回大会では団体の決勝を越谷ＡチームとＢチームで優勝を競い合った。第９回大会に限らず、本大会の団体戦・個人戦においても、毎回上位入賞を果たしている。他にも、各種大会において全国大会出場選手を輩出している。

今後の抱負としては、健全なる青少年の育成を図り、会員一同が切磋琢磨し、師弟同行汗を流して本連盟の発展と剣道の普及・発展に努めていく所存です。

狭山市剣道連盟　－常の心－

会長：大河原　徳雄　　事務局長：中山　英宣

「常の心」は、会長の直筆の手ぬぐいの標記であります。　大河原会長を中心に、強く、正しく、明るく、我を祈り、皆仲良く相和して、感謝の気持ちを忘れず、日々稽古に励んでおります。昭和40年代後半から首都圏40km圏内という立地条件から、人口の増加とともに剣道人口も増加する中で、道場、クラブ、剣友会が生まれ、青少年の育成、自己の錬磨研鑽を目指し、大会の開催、合同稽古等を重ね、そして当連盟の雰囲気の良さと一人一人の努力を源として、剣道の理念「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である」を踏襲した事業を実践・展開しております。

1　沿革　昭和27年10月、全日本剣道連盟が創立され、この下に各都道府県単位に連盟が置かれました。さらにこの下に各警察署単位に支部を組織するため、昭和30年９月、狭山・入間の両市で成る、埼玉県剣道連盟狭山支部が設立されました。初代内海定夫、二代岩垂安国、三代北村士守、四代市川数丸、五代栗原福治、六代河井善雄、七代田口豊次、八代栗原憲一、九代佐藤一夫の諸先生、そして本年４月より十代大河原徳雄で、活動をつづけております。昭和47年、市立武道館が八幡神社脇に建設され、これを契機に狭山市の剣士たちで組織された狭山市剣道連盟が誕生しました。平成５年４月に埼玉県剣道連盟狭山支部が狭山支部と入間支部に分かれて組織され、この後、埼玉県剣道連盟狭山支部と狭山市剣道連盟が統合され、現在に至っています。

2　活動状況と今後の目標　当連盟の主な事業としては、指導の統一性を図る目的で、７級からの級審査会を年３回開催、大会は年２回実施、合同稽古会（合宿を含む）、審判講習会等を行うとともに、中体連大会への審判員派遣、加盟団体等主催の大会の後援を行っております。また、HPにより、会員への情報発信と情報共有を図り、組織の活性化を図っております。

剣道は、竹刀を用いて打突し合うスポーツという見方もありますが、我々は剣道を続けることによって、心身を鍛錬し、人間形成を目指す「武道」であるとの認識のもと、稽古に励んでいます。日本独特の文化・武道である剣

道を一人でも多くの人たちに伝え、特に次世代を担う子供たちに剣道を伝え、長く続けてもらうことはもちろんですが、さまざまな理由で、剣道から離れてしまった剣道経験者を再び剣道界に呼び戻すことができるような環境作りに努めていくも重要なことと考えています。

浦和剣道連盟　－次代に継ぐ剣道文化の普及－

会長：小室駿一郎　事務局長：浅見　雅代

1．沿革　昭和27年（1952）埼玉県剣道連盟が設立、翌昭和28年（1953）には浦和剣道連盟が結成され本年で創立60周年を迎えています。

浦和の剣道の歴史は古く、明治に遡り旧制浦和中学校、旧制浦和高等学校、埼玉師範学校、浦和商業学校等で剣道部の活動が盛んに行われてきた、また、現在の埼玉県庁の周辺に旧武徳殿や高野佐三郎先生が直接指導された浦和明信館があり、埼玉県の武道の拠点としての歴史を築いてきた、鈴木淳厳範士（浦和雄信館長）、奥田芳太郎範士（旧浦和中学校師範）を始めとする幾多の剣道指導者を輩出してきました。埼玉県剣道連盟創設の昭和27年には第１回県下剣道大会が調宮神社の境内において開催、また、第１回県下高等学校剣道大会に浦和高校、与野高校が参加、浦和剣道連盟が設立された昭和28年には第２回県下剣道大会が浦和玉蔵院の境内で開催されたと記録されている。

昭和29年には初代剣道連盟会長に川久保義典（浦和市長）が就任した。この年、栃木県日光市で開催された第１回全国高等学校剣道大会には埼玉県代表として浦和高校が団体出場した。また、第１回埼玉県民警親睦剣道大会では浦和チームが優勝した。昭和35年第２代会長に本田直一、昭和43年第３代会長に相川曹司、いずれも浦和市長が就任した、この年現在の埼玉県庁第２庁舎北側に埼玉県立武道館が建設され（平成15年に上尾に移転）、県内より多くの剣士が集い各種の大会や剣道教室、稽古会が行われた。平成15年に開催された第１回埼玉県剣道大会少年の部において団体優勝した。歴代会長には第４代：尾崎倍治、第５代：佐藤　顕、第６代：野辺多津男、第７代：高澤　博、第８代：田辺賢作、第９代：岩崎　清、第10代：豊島正夫が就任している。

2．組織及び事業　現在は平成13年に政令市として発足した、さいたま市の旧浦和市、与野市地域の５区（浦和区、南区、緑区、桜区、中央区）を支部組織とし、合計22団体、29中学校、13高等学校、会員数は一般：360名、小中高校生：380名となっている。年間大会行事としては４月：年齢別剣道大会（さいたま市合同）、６月：浦和剣道大会、９月：さいたま市民大会、３月：さくら草旗剣道大会を関東各地からの少年強豪チームを迎えて開催している。４月、９月、12月には級審査会及び初二段講習会を３回実施し、10月には指導者研修会（さいたま市合同）を開催している。今後とも、時代を継ぐ青少年の健全育成と剣道文化の普及発展を目指して組織の充実を図り、会員相互の交流を進めたい。

「大会記録この1年」（2013年後期）全国大会（上位）入賞結果・県予選会結果（報告）

順不同

――全国大会――

○第35回全日本高齢者武道（剣道）大会（６・３）
特組　第２位　川下紘生（久喜）

○第46回全国教育系大学学生剣道大会（７・９）
男子団体　第３位　埼玉大学
（麻生、深尾、神宮司、鈴木、穂積、神崎）

○第５回全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会（７・15）
優勝（岡崎、田中、荒井、市村、栗田）

○第44回全校高等学校定通制体育大会（８・４、５）
女子団体　優勝　埼玉県（大宮、佐藤、濱名）
女子個人　優勝　大宮百合恵（大宮中央高）

○第68回国民体育大会剣道競技
少年女子　準優勝　埼玉県（駒林、岡崎、辻本、尾関、端）

――全国大会予選会――

○埼玉県剣道選手権兼全日本剣道選手権大会（８・31）
①東永幸浩（警察）②橋本桂一（東松山）③米屋勇一（警察）

――関東大会――

○第53回関東七県対抗剣道大会（７・28）
第３位（濱本、本郷、市村、足立、嶋田、米屋、金子、加治屋）

――県内大会――

○埼玉県剣道大会小学生の部（９・21）
団体戦　①川口Ａ　②越谷Ｂ　③川口Ｂ　③越谷Ａ
個人戦　**３年生の部**
①鈴木優太郎（越谷）②上木蒼太（越谷）
③木下桜羅（入間）③池田　翔（北本）
４年生の部
①白井希弦（川口）②小林瞬也（越谷）
③崔　瑳奏（朝霞）③小川彰太郎（蕨）
５年生の部
①井上悠太郎（西入間）②内村日向（北本）
③大西　尊（北本）③大久保駿（川口）
６年生の部
①細渕健斗（入間）②木下緑士（入間）
③小川大翔（鴻巣）③塚田大翔（上尾）

あとがき　平成25年度大会記録は、埼玉県剣道連盟創設60周年を記念するがごとく大記録が刻まれました。とりわけ、全日本都道府県対抗女子剣道大会優勝、国体少年女子の２年連続準優勝は県内剣士にとって誇らしい成績でありました。今号は60年誌（この10年）の編集、刊行と重なり、急な原稿依頼もありましたが、貴重な原稿をお寄せいただいた皆様に感謝を申し上げます。会員各位のご高覧をお願いし、あとがきとします。（池田）